

10/24-30 聖書日課と分かち合い

10月24日(月) 哀歌2: 8-12 エルサレムの荒廃

8 主はおとめシオンの城壁を滅ぼそうと定め

打ち倒すべき所を測り縄ではかり

御手をひるがえされない。

城壁も砦も共に嘆き、共に喪に服す。

9 城門はことごとく地に倒れ、かんぬきは砕けた。

王と君侯は異国の民の中にあり

律法を教える者は失われ

預言者は主からの幻による託宣を

もはや見いだすことができない。

10 おとめシオンの長老は皆、地に座して黙し

頭に灰をかぶり、粗布を身にまとう。

エルサレムのおとめらは、頭を地につけている。

11 わたしの目は涙にかすみ、胸は裂ける。

わたしの民の娘が打ち砕かれたので

わたしのはらわたは溶けて地に流れる。

幼子も乳飲み子も町の広場で衰えてゆく。

12 幼子は母に言う

パンはどこ、ぶどう酒はどこ、と。

都の広場で傷つき、衰えて

母のふところに抱かれ、息絶えてゆく。

エルサレムの滅亡の記載は紀元前の事実ですが、悲しいことに現代でも私たちが映像含め見聞きするウクライナ、ミャンマー、アフガン、香港など世界の現実、人間(国)のエゴから生まれた心痛む出来事です。神さまを無視した生活を送っている人間の罪故、平和と言われている日本でもこのような悲惨な現実が見える別の形で、又潜んで見えない形で沢山あることを憶え祈られます。主よ、私たちが憐れんでください。助けてください！

10月25日(火) 哀歌3: 16-27 苦渋と欠乏の中で

16 砂利をかませてわたしの歯を砕き

塵の中にわたしを打ち倒す。

17 わたしの魂は平和を失い

幸福を忘れた。

18 わたしは言う

「わたしの生きる力は絶えた

ただ主を待ち望もう」と。

19 苦汁と欠乏の中で

貧しくさすらったときのことを

20 決して忘れず、覚えているからこそ

わたしの魂は沈み込んでいても

21 再び心を励まし、なお待ち望む。

22 主の慈しみは決して絶えない。

主の憐れみは決して尽きない。

23 それは朝ごとに新たになる。

「あなたの真実はそれほど深い。

24 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い

わたしは主を待ち望む。

25 主に望みをおき尋ね求める魂に

主は幸いをお与えになる。

26 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。

27 若いときに軛を負った人は、幸いを得る。

著者は人生の苦渋と欠乏の中で、平安を完全に失い生きる力も無くなったと絶望的な気持ちを告白しています。22節～人を絶望から立ち直らせる信仰のよりどころは《主の慈しみ》以外の何物でもありません。《慈しみ》は、契約の神の変わらない心・愛を意味しています。25節～現実は厳しくても主に望みをおく時に幸いを得るとあります。自分の考えでジタバタせず、祈った後成すことをなし委ねて、主の前に黙して幸いを待つ姿勢の大切さを教えられました。

10月26日(水) ルカ21:20-24 エルサレム滅亡の予告

20 「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。21 そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。田舎にいる人々は都に入ってはならない。22 書かれていることがことごとく実現する報復の日だからである。23 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。この地には大きな苦しみがあり、この民には神の怒りが下るからである。24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれる。異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる。」

異邦人でも先に救われた私たちクリスチャンの生き方が問われてるように教えられました。主によって罪赦され愛される存在として、生かされているのにも関わらず、「罪赦された罪人」であることをすっかり忘れて、時には知らない内に人を裁いてしまったり、妬んだり、主を崇め賛美することを忘れてしまって呟いてしまう弱い者であることを思います。今を生きる私たちもこのような悲しい出来事が起こる前に日々悔い改めて新たにされることを願います。

10月27日(木) ルカ21:25-28 解放の時到来の約束

25 「それから、太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。26 人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。27 そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。28 このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の 때가近いからだ。」

地震では海が荒れ狂いますし 26 節では「人々はこの世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うであろう。天体が揺り動かされるからである。」と恐ろしいことが書かれていますが、その先には主の再臨があることを約束されています。その時私たちは全ての苦悩・欠乏から解放されます。願わくはその日の前に、苦しみの中にある人々、生きる意味を求める人々、全ての方々が主を知ることができ救いへと導かれますように主に願い祈ります。

10月28日(金) ネヘミヤ 1 : 1-3 エルサレムの現状

1 ハカルヤの子、ネヘミヤの記録。

第二十年のキスレウの月、わたしが首都スサにいたときのことである。2 兄弟の一人ハナニが幾人かの人と連れ立ってユダから来たので、わたしは捕囚を免れて残っているユダの人々について、またエルサレムについて彼らに尋ねた。3 彼らはこう答えた。「捕囚の生き残りで、この州に残っている人々は、大きな不幸の中であって、恥辱を受けています。エルサレムの城壁は打ち破られ、城門は焼け落ちたままです。」

エルサレムに残ったユダヤ人も、捕囚の民同様に城壁は打ち砕かれて城門は落ちたまま大きな不幸の中にあり恥辱を受けていました。現代でも世界各地に戦争・内紛で、クーデターで建物は壊されままだになり、住む家もなく生き残った人々もあやめられたり、連れ去られたりしています。遡れば幸福の為の十戒の「殺してはならない。」「盗んではならない。」「隣人の家を欲してはならない。」の掟を守れない人間の罪の結果を思います。主はどれ程の痛みを持って執り成しておられることでしょう。

10月29日(土) ネヘミヤ 1 : 4-11 ネヘミヤの祈り

4 これを聞いて、わたしは座り込んで泣き、幾日も嘆き、食を断ち、天にいます神に祈りをささげた。

5 わたしはこう祈った。

「おお、天にいます神、主よ、偉大にして畏るべき神よ、主を愛し、主の戒めを守る者に対しては、契約を守り、慈しみを注いでくださる神よ。6 耳を傾け、目を開き、あなたの僕の祈りをお聞きください。あなたの僕であるイスラエルの人々のために、今わたしは昼も夜も祈り、イスラエルの人々の罪を告白します。わたしたちはあなたに罪を犯しました。わたしも、わたしの父の家も罪を犯しました。7 あなたに反抗し、あなたの僕モーセにお与えになった戒めと掟と法を守りませんでした。

8 どうか、あなたの僕モーセにこう戒められたことを思い起こしてください。『もしも背くならば、お前たちを諸国の民の中に散らす。9 もしもわたしに立ち帰り、わたしの戒めを守り、それを行うならば、天の果てまで追いやられている者があるとしても、わたしは彼らを集め、わたしの名を住まわせるために選んだ場所に連れて来る。』10 彼らはあなたの僕、あなたの民です。あなたが大いなる力と強い御手をもって贖われた者です。

11 おお、わが主よ、あなたの僕の祈りとあなたの僕たちの祈りに、どうか耳を傾けてください。わたしたちは心からあなたの御名を畏れ敬っています。どうか今日、わたしの願いをかなえ、この人の憐れみを受けることができるようにしてください。」

この時、わたしは献酌官として王に仕えていた。

ユダに残っている人々は、大きな不幸の中であって恥辱を受け、イスラエルの城壁は崩され、城門は焼け落ちたままだと聞いたネヘミヤは、ユダの人々のため泣き嘆き断食をして昼も夜も執り成しの祈りをされました。その祈りは「イスラエルの人々の罪を告白します。」と告白からは、完全に主語は一人称わたし(又は同複数)になり、深い悔い改めと赦しの憐れみを求めて祈ります。ネヘミヤの城壁修復事業の一切はこの祈りから出発し、この祈りが土台となり、全てが導かれていきます。

10月30日(日) ネヘミヤ2:1-10 エルサレムへの想い

1アルタクセルクセス王の第二十年、ニサンの月のことであった。王はぶどう酒を前にし、わたしがぶどう酒を取って、王に差し上げていた。わたしは王の前で暗い表情をすることはなかったが、2王はわたしに尋ねた。「暗い表情をしているが、どうかしたのか。病気ではあるまい。何か心に悩みがあるにちがいない。」わたしは非常に恐縮して、3王に答えた。「王がとこしえに生き長らえられますように。わたしがどうして暗い表情をせずにおれましょう。先祖の墓のある町が荒廃し、城門は火で焼かれたままなのです。」4すると王は、「何を望んでいるのか」と言った。わたしは天にいます神に祈って、5王に答えた。「もしも僕がお心に適い、王にお差し支えがなければ、わたしをユダに、先祖の墓のある町にお遣わしてください。町を再建したいのでございます。」6王は傍らに座っている王妃と共に、「旅にはどれほどの時間を要するのか。いつ帰れるのか」と尋ねた。わたしの派遣について王が好意的であったので、どれほどの期間が必要なのかを説明し、7更に、わたしは王に言った。「もしもお心に適いますなら、わたしがユダに行き着くまで、わたしを通過させるようにと、ユーフラテス西方の長官たちにあてた書状をいただきとうございます。8また、神殿のある都の城門に梁を置くために、町を取り巻く城壁のためとわたしが入る家のために木材をわたしに与えるように、と王の森林管理者アサフにあてた書状もいただきとうございます。」神の御手がわたしを守ってくださったので、王はわたしの願いをかなえてくれた。9こうして、わたしはユーフラテス西方の長官のもとに到着する度に、王の書状を差し出すことができた。王はまた将校と騎兵をわたしと共に派遣してくれた。10ホロニ人サンバラトとアンモン人の僕トビヤは、イスラエルの人々のためになることをしようとする人が遣わされて来たと聞いて、非常に機嫌を損ねた。

ネヘミヤが祈りの後、王に仕えていると「暗い表情をしているが、…何か心に悩みがあるに違いない。」とネヘミヤを気遣ってくださいました。王の優しさに非常に恐縮しつつも状況を説明すると「何を望んでいるのか。」と再び問われ町の再建の希望を伝え、王がネヘミヤの派遣について好意的でしたので、行く道と城門城壁の修復工事がスムーズに行くように手配もお願いしました。「神の御手がわたしを守って下さったので、王はわたしの願いをかなえてくれた。」と1章4節からの熱い祈りが現実として応えられていることに感謝いたします。

(担当：K.W.)